小金井市環境市民会議

会報 No.08　小金井の環境をみんなで考えるマガジン　2008.08

くるりん・ぱ

kururin.pa

http://www.koganei-kankyo.org/

グレンちゃん
ぐれてるワルだけど
さみしがりや。
クリンちゃんとは
おともだち…？

[特集]
'08 夏を涼しく

クリンちゃん
無口で
はずかしがりや の
キレイ好き。

巻頭言！　宴は終わろうとしている。さて・・・

「洞爺湖」はもはや遠い過去のように思えます。あの人たちはいったい何を話しあい、何を決めたのでしょうか……。それはともかく、地球の温暖化を防ぐと称して、またさらなる問題や環境破壊を起こしそうな技術的解決が、今続々と生まれているようです。

原子力発電はいわずもがな、たとえば風力発電。ずらっと並んだ「大規模風力発電機」は、地上におよぼす風の力や向きなどが変わることによって、その地域の微気候を攪乱しないですむのでしょうか。今、わたしたちが用いている莫大なエネルギーを自然エネルギーでまかなったら、環境はいったいどのようになるのでしょうか。CO_2 は減少するかもしれません。でも、他の環境問題を引き起こすことはないのでしょうか。ある環境問題の解決のために、別の環境問題が引き起こされなければならないとすれば、その原因はいったいどこにあるのでしょうか。環境問題の本質は、けっして CO_2 の増加でも環境汚染でもないことに、そろそろ気づかなければなりません。

そうです、わたしたちの暮らしそのものが環境破壊の原因、環境問題なのです。より多くのものが必要、より多くのエネルギーが必要。わたしたちは、ある時代から、そうしなければ、経済が、社会が成り立たないと思ったり、思わせられたりしてきました。「豊かになるためには人口を増やさなければならない。増えた人口を養うためにはもっと経済成長が必要だ……」。

じっさい、「景気が悪くなる」と断言されると、多くの人は自らの近未来におののくようにしつけられています。一方で、地球を蚕食すること（これは CO_2 の増加だけではありません）は今、あるいは自ら関知しうる近未来には直ちに影響を与えないと楽観視して、放置されます。結局、あたかも自然が無限に存在するかのように形を変えて宴は続けられてしまいかねません。

平穏に戻った洞爺湖

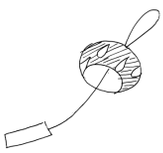
けれど、わたしたちは今、「狂乱の宴」は終わろうとしていることを自覚しなければなりません。もちろん、この宴は終わっても、わたしたちは新たな暮らしのあり方を組み立てることはできるし、それは「豊かな」暮らしですらあり得ます。これまでの宴にならされた身には多少のとまどいがあるかもしれませんが、ものの見方を少しだけずらせば、まったく異なった世界を見ることは可能です。そのような世界をかいま見ることができたなら、そこに向かってまず一歩を踏み出せばいいのです。今必要なのは、そのような想像力とちょっぴりの実行力なのでしょう。宴は終わろうとしている。さて……。

（文=土井利彦）

[特集] '08 夏を涼しく

2008 年も夏の盛り。みなさんはいかにお過ごしでしょうか。
会員から寄せられた、暑い夏を楽しく涼しく過ごすためのアイデアを紹介します。

「グレンちゃんの ? 日記」



おっちゃん、「納涼」ってなんや?

納涼とは暑さをしのぐことじゃ。夕涼みでも行こかいな。
東京湾納涼船、納涼花火大会、納涼盆踊りに納涼ビアガーデンや納涼美女コンテストに納涼音楽祭、
納涼カーニバル。どーや、いっぱいあるやろ。

それっておっちゃんの趣味やろ? 暑苦しい!
そんなんで暑さしのげるとは思えんわ。よけーあつーなってきよった。

風鈴聞きながら昼寝して、桃でも食って花火見て暑気払いしたらええんじゃ。
ほな、納涼カーニバル行ってくるわ。サンバ踊ってくるでー。

やっぱ暑苦しい!おっちゃんや。どうやったら暑さしのげるんやろ

家の前に縁台出して、おっちゃんと将棋でもさして、
お母ちゃんが「スイカ食べるか」って持って来てくれて、
そこに可愛いクリンちゃんが浴衣着て登場。
クリンちゃんとあたい、手つないで川原行って「線香花火せえへんか」「ええよ」
お母ちゃんが家の前に打ち水して、クリンちゃんが「グレンちゃんの部屋に上がっていい?」なんて言っちゃって
風鈴がチリンチリンとなって、風がふわーと来て「冷たい麦茶でも飲む?」ってゆうたら
「うん」てなことになったりして、こういう展開がやっぱええわ。
「涼む」感じが風流やねん。

大胆に暮らしを見直す

◎やってみれば快適! 半袖・半ズボン

日本の夏は、どう考えても「湿潤熱帯」。こんなところでスーツを着るなんて異様です。スーツなんて、乾燥して涼しいヨーロッパの地方着にすぎません。

ヨーロッパ人は自分たちの思想や暮らしが「普遍的」と考えているせいか、自分たちの地方着までグローバル・スタンダードにしてしまいました。この国は、明治の「脱亜入欧」のように西欧のものは訳もわからず崇拝するので、がんがん冷房してスーツを着るのです。「クールビズ」だって基本はスーツです。とてもヘンですね。

夏はおもいきって、半袖・半ズボン! こうすれば快適です。ただ、頭のカタイ会社人の世界で、そんな格好で出社したら、2～3日で出社に及ばず…、でしょうね。どのような仕組みが環境を大切にする行為を阻んでいるか、ようく考えてみてください。「夕涼みよくぞ男に生まれけり」がなぜ許されないのか、ようく考えてみてください。

◎夏の午後はごろんと昼寝

暑い夏は、なんといっても昼寝です。すだれを垂らし、おもいきり風通しをよくした部屋で、ちりんちりんという風鈴のはかなげな音を聞きながら、うつらうつらするのは乙なものです。

「とんでもない。暑いときにも汗水垂らして働かなければ、企業競争・国際競争に負ける。とにかく生産性をあげることが幸せ……」と思っているあなた、経済は暮らしの「手段」であることを思い出してください。GNPがどんなに高くても、毎年3万人の自殺者を出す国の、どこが幸せなんでしょうか。のんびり昼寝の幸せを見直しましょう。

(文=イソノサバヲ)

涼しい音楽・涼しい音色

みなさんは暑い時にどんな音楽を聞きますか？　音楽で「涼」を感じることができるのでしょうか？

毎年、夏が近くなると、巷では夏を連想させる音楽が放送メディアに流れます。ブラジル音楽、ハワイアン、琉球民謡、湘南、それに夏＝海を歌うロックなどが典型かもしれません。ときにそれらは、暑い夏の到来を積極的に謳歌するための商業的なイメージ・コントロールとも言えるでしょう。映画でもこの時期、海や北極に関する作品が公開されると、なんとなく視覚的に涼を感じさせる場所へ（意図的に）追い込まれているような気がします。同様に音楽も、視覚的記憶のイメージを誘発し、涼しさをもたらすのかもしれません。

例えば、リラックスしたいときなら先に述べた南国の音楽（レゲエ、カリプソ、インド）、また、とにかく寒いと感じたいのなら、あえて北国（北欧のノルウェーやスウェーデン、アイスランド）の音楽を聴くのも一考かもしれません。それに音だけなら、（鈴）虫の音（小金井ならキンヒバリ）、風鈴、水琴窟など適度に金属的な響きが風雅な涼しさを感じさせます。

ここで、本当に暑いとき、つまり「冷たいものに触れてみたい」と思うときに聴くおすすめの音楽をいくつかピックアップします。

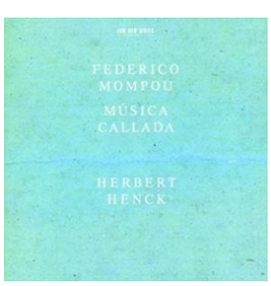
1：「Mompou: Musica Callada：Herbert Henck（ECM）」。これは、主に現代音楽を中心に演奏しているドイツ人ピアニスト、ヘルベルト・ヘンク（1984～）が、20 世紀中頃に活躍したスペイン・カタロニア出身の作曲家フェデリコ・モンポウ（1893-1987）の“沈黙の音楽”と名づけられたピアノ・ソロ作品集を演奏したものです。緊張感、ミニマリズム、そして情感が交錯したピアノの金属音の響きが部屋中に響く時、ひんやりと冷涼さが漂います。

2 & 3：米国シカゴを拠点とするクランキー（Kranky）という小さな音楽レーベルが提供するアーティストたちの作品群。彼らの音楽は、音楽マニアの間では、‘ドローン（drone）系’と呼ばれていて、もとは‘80 年代に英国で生まれたアンビエント・ミュージック（環境音楽）の 21 世紀版といえますが、（英語で‘漂うような‘という意味の）ドローン系の音はアンビエント音楽の典型、背景音ではなく、より自立した楽曲と言えます。主にインスト（歌ナシ）作品が多く、アコースティック・ギターとシンセが中心の音作りです。Stars of the lid、Pan American、The Dead Texan、Labradford など代表的なアーティストの作品を聴くと、文字通り深海で漂っているようなクールな気分になります。それぞれの（メロディではなく）音のピースがあまりに美しく、なかなか海の底から浮かび上がれないので気をつけなければいない音楽です。

4：メキシコの近代作曲家マニュエル・ポンセのギター・ソナタ集。バロック的な美しい旋律で落ち着けます。

5：パット・メセニー＆マイケル・ランドー（ギターとピアノのデュオ）。やはり金属音系の楽器どうしなのでクールに感じます。

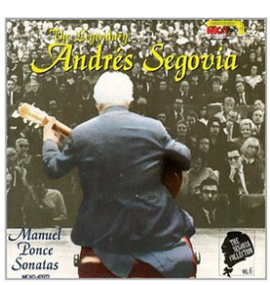
6：60 年代初めのエキゾチック・ミュージック集。なぜか不思議に清涼感を感じるアルバム。（文＝緒方恵一）



1

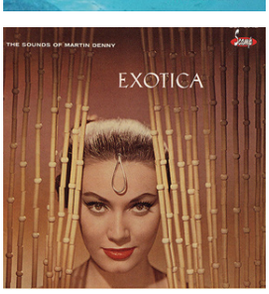
2

3



4

5



6

1. Mompou: Musica Callada：Herbert Henck(2000, ECM)＊
2. Quiet City: Pan American (2004, Kranky)
3. The Dead Texan (2004, Kranky)
4. Ponce:Sonatas Andres Segovia Manuel Ponce (1989, MCA) マニュエル・ポンセ　ソナタ集：アンドレス・セゴヴィア
5. メセニー・メルドー ～ブラッド・メルドー　パット・メセニー（ワーナーミュージック・ジャパン，2006）
6. ベリー・ベスト・オブ・マーティン・デニー　マーティン・デニー（EMI ミュージック・ジャパン，2005）

＊「モンポウ：沈黙の音楽」は高橋悠治の演奏版（2008, フォンテック）もあります。

[特集] '08 夏を涼しく

江戸の虫売り

明治初期の屋台の虫売り

エコがクローズアップされる昨今、江戸の昔に習って「涼をもとむ、涼を呼ぶ」さまざまな工夫が見直されているようです。「葦簀(よしず)で日差しを避け、風通しをよくする」「打ち水をする」など。また「風にそよぐ軒先の風鈴の音や、鳴く虫の声を聞く」といった聴覚を使った涼み方も注目されています。なかでも、スズムシの鳴き声（実際はハネをこすり合わせて音を出す）の涼やかさは、現在でも人気です。

虫の音を愛でることで心情を表現する文化は古く万葉の時代から続き、王朝貴族の風流として、また文学として昇華しました。時代は下り、江戸の庶民にとって虫の音は秋の楽しみ方のひとつでした。春には花見、秋には虫の音と、近傍の山野に出かけ四季の移り変わりを感じていたようです。

寛政の頃(1789-1801)になると、手頃な値段で鳴く虫を売り歩く商売が江戸市中ではやりました。野辺へ繰り出すでなく、狭い長屋の庭先で虫の音に季節を感じたのでしょう。大都市江戸ならではの話です。縁日になると、寺社の境内に虫売り屋台も並びました。店先に吊り下げられた虫籠からはスズムシを筆頭に、マツムシ、エンマコオロギ、また涼やかさよりも「暑い夏!」を感じさせるキリギリスやウマオイなどなど、賑やかな「呼び声」があふれ、人を集めたそうです。

明治時代以降、日本にやってきた外国人にとって虫売りはもの珍しい「見物すべき」風俗であったようです。しかし、小泉八雲ことラフカディオ・ハーン(「怪談」などを外国に紹介しました)は近代化の進む日本で、こういった伝統的な文化･風習を理解し、愛しました。『虫の演奏家』『草ひばり』といった、鳴く虫を題材にした随筆を残しています。

（文=高橋利行）

涼しさ100%! 捨吉庵(すてきちあん)むじな噺(ばなし)「ぶっさりお化け」～小金井の昔話より～

昔々のその昔、多磨墓地から火葬場、二枚橋辺りにかけて人も通らぬじめじめとした道がございましたそうな。蛇もたくさんおったそうで、足を取られた者は黒々とした蛇のかたまりに腰を抜かして、沼から這い出ることもできなかったそうでございます。

ある日のこと。住む人もなく、通る人とていないこのような道にいかにも強そうなお侍さまが目の玉をむきだし、舌を出し、それはそれは恐ろしい形相で首を絞められて死んでおりました。そのお侍さまの両手には、長くて白い老婆の髪の毛が握りしめられておったそうでございます。

それからしばらくして、あるお侍さまがこの道を急ぎ足で通っておりますと、行く手の先に何やら老婆が苦し気にしゃがみ込んでいるようでございました。先を急ぐ様子のお侍さまでしたが気の毒に思い、その老婆に声をかけ、「おぶって進ぜよう」と親切に老婆に背を向けたのでございます。

老婆はポロポロと涙を流し、お侍さまの背におぶさっておりましたが、しばらくすると不気味な声を出しながらその細くて長い腕をお侍さまの首に巻きつけてまいりました。お侍さまは苦しくなり、なんとか離そうといたしますが老婆は恐ろしいような力で、もがけばもがくほどにお侍さまの首を締めつけてまいります。とうとう老婆の指が食い込んで、お侍さまも「もうこれまでか」と思ったその時でございます。

けたたましく夜鳥が啼き、頭の上を飛んで行ったのでございます。すると、にわかに老婆が苦しみだし「ああ～夜が明ける」と言うなり、お侍の首から老婆の腕が消え姿も消えていくではございませんか。お侍さまは怖い目にあって、飛ぶようにこの地を離れて行ったようでございます。この老婆の話は「ぶっさりお化け」と言われ、たちまち噂になって広がったそうでございます。

（絵と文=早咲眞子）

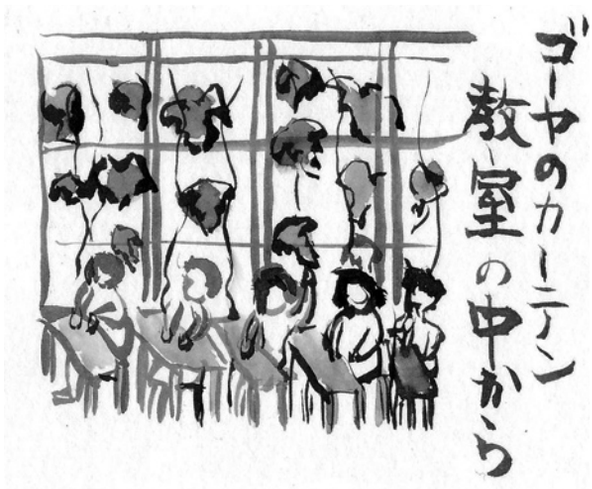
緑小学校の「緑のカーテン」探訪

7月9日、小金井市立緑小学校の「緑のカーテン」の様子を見に伺いました。

副校長先生の案内で校舎南側に出てみると、2教室分の幅で3階までネットが張られていて、緑のカーテンは今ようやく2階に届くかな、というところでした。植物の種類はゴーヤだけでしたが、昨年はアサガオやヘチマも植えたそうです。

4年生の理科教材にツルレイシ（ゴーヤ）の観察があり、4年4組の川俣先生と生徒たち、それに栽培委員が世話をしているというので、4組の教室に川俣先生を訪ねました。以下はそこで聞いてきた事柄です。

種をポットにまいたら、かわいいふたばが出たと生徒が黒板に描いてくれました。ゴーヤは発芽率があまりよくないので、先生が一部苗を買ってきたそうです。肥料は学校の落ち葉で作った堆肥で、今年はごみ処理機の「ごみ太郎」が緑小に設置されるので堆肥づくりが楽になるということでした。「ゴーヤがあると涼しくなりますか?」の問いに、先生の答えは「葉が茂るとやっぱり涼しくなりますよ」でした。



また緑小では新しい試みとして、校庭に面したテラスに沿わせて、藤のカーテンも育てていました。蔓（つる）は元気よく3階まで伸びていましたが、まだ繁茂という感じではなく来年が楽しみなようです。

帰り際、昇降口の掲示板で見た昨年の写真、教室から窓外を写した1枚は、まさに涼しげな緑のカーテンになっていました。緑小のゴーヤのカーテンの写真は、11月の環境博に市民のみなさんにも見ていただこうと計画しています。

（絵と文=千村裕子）

緑のカーテンは我が家にも！

我が家の南向き縁側に、2年前から緑のカーテンを作っています。ゴーヤ2本、ヘチマ2本、アサガオ数本です。それぞれ勝手に這い上がり、放っておくと1直線に上に伸びるので、約3日ごとに横向きにしてネットにくくりつけます。

やがて黄色い花が咲き、ユーモラスなヘチマとゴーヤが垂れ下がって揺れ、目を楽しませてくれます。ゴーヤは食べきれないほど採れて、採らないと不気味なオレンジの口を開けて地面に落ちます。ヘチマ1本から、秋には1升瓶いっぱいのヘチマ水が採れます。1年中、化粧水を買わなくて済み、経済的。お肌にもとても良いですよ。

緑のカーテンのおかげで、我が家はクーラーなしで過ごしています。電気代は平成18年7月3,892円、19年7月4,236円也。ヘチマ水の作り方は次の号に。乞うご期待!!

（絵と文=千村裕子）

[特集] '08 夏を涼しく

「建物と夏」

江戸東京たてもの園 特別展 日本の建物 第2部
(2008.7.1-8.31)

吉田兼好は、『徒然草』(1330 年頃) で「家の造りやうは、夏をむねとすべし」と記しています。歴史の中でも囲炉裏など冬に暖をとるのは比較的簡単なことでしたが、夏の暑さをいかにしのぐかは、これまでの日本建築における最大の課題とされてきました。

8 月 31 日まで開催中の江戸東京たてもの園「建物と夏」展は、このような夏の暑さに対して、五感で涼を楽しむ先人たちの繊細な感受性や工夫などが紹介されていて、とても楽しめる企画です。その「建物と夏」展の見所に加え、建築にとっての涼とは何かについて考えてみたいと思います。

＊

ごく簡単にいうと、私たちは体熱の放熱スピードが遅い時に「暑い」と感じます。それには日射、表面温度、気流、気温、湿度などの環境条件が影響し、室内で涼しく過ごす基本は「室内温・湿度を下げる」と「風通しをよくする」の2点に尽きます。その基本を念頭において、暑さをしのぐためのメカニズムを整理すると以下の5つになります。

●暑さを感じるメカニズム

1) **伝導 (物質の内部移動)** 氷枕、カイロ、あんか
2) **対流 (水や空気の流れで熱を運ぶ)** 扇風機、団扇
3) **放射 (物体の表面温度の差＝物体の温度が高いときに、低いものから熱を奪う)** 夏の冷えたトンネル
4) **蒸発 (液体の蒸発時に熱量を周囲から奪う)** 汗をかくと体温が下がる、打ち水も同様

夏向きの日本建築空間の例としては、**路地** (日影、緑陰などのある路地裏空間は涼しい)、**民家** (民家の長い軒により壁面が蓄冷される。それにより、室内の表面温度を低く保つことができる)、**京都の町屋** (表通りから取り込まれた風が、奥行きの長い日陰空間を流れるうちに室温で冷やされてゆく) などがあります。

室内での意匠と機能性を兼ね備えた内装用品として、**簀戸**(すど) (簾入り戸)、**大坂格子** (格子扉)、**座敷簾** (御簾(みす)＝内装簾) などは通気と遮蔽性を兼ねたものであり、籐枕や井草円座は湿気を吸収します。また、ガラス製の徳利、金魚鉢、ガラス灯籠など清涼感のある調度品は、夏ならではの風物でもあります。

左：「建築と夏」展ポスター
右：簾戸 (行方木工所)

左：インドのチャンディガール議事堂
右：名護市庁舎 (ともに緒方恵一撮影)

夏と向きあい、周辺の環境にとけこませた現代建築もあります。京都高瀬川の川面レベルに建てられたTIME' s (1984,1991 安藤忠雄作)、通換気をすべて自然にまかせ、空調電気設備のない沖縄の名護市庁舎 (1981 象設計集団作) などは、これらの先人たちの英知を現代に生かしたものといえるでしょう。

海外の建築では、南仏マルセイユの共同住宅ユニテ・ダビタシオンやインドのチャンディガールの議事堂 (ル・コルビジェ作) は、ブリーズ・ソレイユ (仏語で「日除け」の意) を外壁に造り込んだものです。また、メキシコシティのバラガン自邸 (ルイス・バラガン) は室内に水庭を造り、地表と水面の温度が異なることで気圧が変化し、風を呼び込む現象を利用しています。

「建物と夏」展では夏の気候に向きあう建物の歴史や建材と熱との関係、現代におけるキーワード (屋上緑化、熱線反射ガラス、雪冷房、水冷、エコガラスなど) が、わかりやすく展示されています。 (文=緒方恵一)

OLD&NEW 夏の風景 (1)

赤羽川の鮎しゃくり

赤羽川は日本最多雨地帯（三重県南部）を源とする全長 20km ほどの距離を一気に駆け下る小さな川だ。源流から河口まで自転車で移動できる距離のためか、どこもかしこも子どもたちのフィールドとなっている。その中流域での夏の遊びの話…。

夏の赤羽川では鮎漁が盛んだ。その漁法のことを地元では「鮎しゃくり」と呼んでいる。竿を使い、「すいがん」と呼ばれる水中眼鏡のようなもので水中を覗き込んで鮎をしゃくる（引っ掛ける）。小学校中学年くらいの男の子は上級生に連れられて川に行くようになる。

「水のねきの石がこーふいとって、中の石が黒っぽて、スイカみたいな匂いしとったら、ようけ鮎おるじょ。泥臭いところはあかん」。確かに、このようなところでは岸辺からでも銀鱗のきらめきが目にはいるほど魚影が濃い。「鮎が左に逃げたら左手で水たたけ。右に逃げたら竿で水たたくんやじょ」。なぜかわからぬが、言われたとおりにすると鮎が川底の石の間をくねくねと泳ぐようになり、しゃくりやすくなる。誰が言い出したことかはわからぬが、代々受け継がれてきた鮎しゃくりの極意（?）だ。

しかし極意を伝授されたとて、1 日川に入っていても 10 匹も捕れない。鮎しゃくりに飽きると「へし」という銛を使って、テナガエビを突く。運がよければ（年に 1 ～ 2 回）うなぎを突くことも。

川の水は冷たい。どんなに暑い日でも一心不乱に鮎を追っていると、体は冷えきってくる。気がつくと唇が紫色になって、お互いの顔を見て笑い転げる。たき火の時間だ。大き目の石でかまど（上を平らにしておくことがちょっとしたコツ）を作り、石を焼くように焚き火をする。かまどの火が落ちてきたら、かまどの平らなところでその日の獲物をすべて焼いて食べる。

ヒグラシが鳴き始めると、火を消して家路につく。その日の成果と翌日の行き場所を相談しながら……。今年もまた唇を紫にする季節がやってきた。　（文=曽我信也）

OLD&NEW 夏の風景 (2)

フォーチュンクッキー ～鳴き砂～

みなさんは「鳴き砂」という言葉をお聞きになったことがありますか?　私が育った日本海側の丹後半島には『琴引浜』という白砂の浜があり、鳴き砂でとても有名なところなのです。白く細かな砂の上を歩くと「フッフッ」と音を立てます。初夏のころ、人もまばらな浜で寝っ転がり、蝶のように手足をバタバタさせると全身で「フッフッフーッ」と大きな音がしたものです。

鳴く砂の秘密は、砂の中に含まれる石英（せきえい）の割合が高いこと。目を皿のようにして砂を見つめると赤やピンクの貝殻のかけらが見え、これらの割合も高いように思えます。海は透明度も高いが波も高く、長い冬場は毎日のように海が荒れ、砂浜は徹底的に洗われます。この厳しい環境が美しい砂の音を生み出すと言われています。

しかし、近頃はこの浜でも砂が鳴かなくなったという話を耳にするようになりました。海水浴客が増え、花火や焚き火の灰が砂に混じり込むと、摩擦を邪魔してしまい砂が鳴かなくなるということです。さらに、この浜にはもう一つ厄介なことが起こっているのです。漂着ごみの増加です。子どもの頃、ごくたまに流れ着くロシア文字やハングルの入った瓶を拾うと、海を隔ててつながっている外の国へと思いを馳せたものでした。

ところが今、琴引浜に限らず日本海側のあらゆる浜にごみが押し寄せ、付近の住民を悩ませています。ペットボトル、プラスチック、建築廃材、医療廃棄物から魚網まで、大陸の大河に乗ってやってくるごみの終着点が日本海の海岸なのです。

歴史学の網野善彦氏が示された環日本海諸国図（日本地図をひっくり返して大陸から日本を見たもの）を見てみると、日本はまるで大陸の大河が造った大きな砂洲のように見えてしまいます。これなら、ごみが溜まっても仕方がないように思えてきます。対岸の国々が経済発展を遂げ、豊かさを享受するようになったことと、ごみの漂着は十分に関係があるに違いありませんが、私たちの国とて決してごみを捨てない国ではないはず。

漢字とアルファベットと不思議な文字の混在する奇妙なプラスチックボトルは、いったいどこを漂流し、どこにたどり着いているのでしょうか…。　（文=韓亨子）

小金井 まち ものがたり

我が家は僻地から高級住宅街に

毎朝、野川を渡り、坂を登って仕事場に…。夕方には（たまには夜に）また坂を下って野川を渡り、「小金井の僻地」と言われている前原町の自宅に戻ります。家から数分の距離に、くじら山と原っぱ。ここに終の棲家をつくって三十数年がたとうとしています。引っ越した頃、年賀状に「朝は霜柱を踏み、夜は満天の星に迎えられるところです」と書いた覚えがあります。

この地が大好きになり、野川の保全に関わることになるとは考えもしませんでした。

いつの頃からか、暑い夏に坂を下るのが楽しみになりました。金蔵院の坂を降りると、す～と涼しい風が頬をなでます。大木に囲まれた小金井神社の近くまで来ると、こころなしか気温も少し低いのではないかと感じます。そして天神橋の上から野川をのぞきます。これって、川と木があるから？　“野川に草が繁り、水が流れる……”これって！　これって！

昼間の気温の上昇も、アスファルト道路ばかりの台地とは違います。常に水が流れ続ける川は、今はやりの「打ち水の天然版（？）」なのでしょうか。電気の力で家の中を冷やそうとして外に暑い空気を出す都市の暮らしを何とかしようとしても、なかなか難しいけれど、自然の力はすばらしい。やはり、“水と緑”。昔から言われている単純なことなのですが、人間はそれらを大事にし共存してゆく必要がありますね。

大木が冷気をもたらす小金井神社

公共施設はない。お店もない。駅に行くには坂もあるところだけれど、私は密かに前原町を「高級住宅街」と呼んでいます。

（文=堀井広子）

Book Review

家守綺譚（いえもりきたん）

著＝梨木香歩（なしきかほ）　新潮社 1,400 円（文庫版もあり）

「気づくと床の間の掛け軸の方から聞こえてくる。私に掛軸など持つ甲斐性はない。これは家主が置いていったものだ。水辺の葦の風景で白サギが水のなかの魚にねらいをつけている図だ。布団から頭だけをそろりと出して、床の間を見ると掛け軸の中のサギが慌てて脇へ逃げ出す様子、いつの間にか掛け軸の中の風景は雨、その向こうからボートが一艇近づいてくる。」

この文章に衝突した時、痛みにも似た懐かしい妄想がわきおこり、初恋の胸の高鳴りのように私を震えさせ、悶えさせた。梨木が発する言葉の波動に甘く酔いしれ、むしゃぶりつくように読む。もう止まらない。お腹をすかせた獣が久しぶりにうまい獲物にありついたときのように、よだれをたらして満足そうに寝転んでいる姿そのままの状態で夜が明けた。自然界と一体になる経験を一度でもすると、彼方側に連れて行かれることを待ちわびるようになる。

本人はこの作品を「料理人が作る自分用の賄いのようなもの」と位置づけている。本人をさしおいて失礼だが自然界への愛情表現の究極系であり、好いた女を手に入れて女房にしたのがこの『家守綺譚』であるというのが私の位置づけである。

梨木はカヌー愛好家でもある。カヌーを漕ぎだし、死と隣り合わせになった経験もある。カヌーに乗っていても、彼女の視線は岸辺の小さな植物を見逃さない。この本に出てくるボートも水辺もカヌーイストならではの表現だ。映画化された『西の魔女が死んだ』も児童文学ではあるが幅広い年代に読まれている。

（文=早咲眞子）

雨を活かす（おはなしその２）

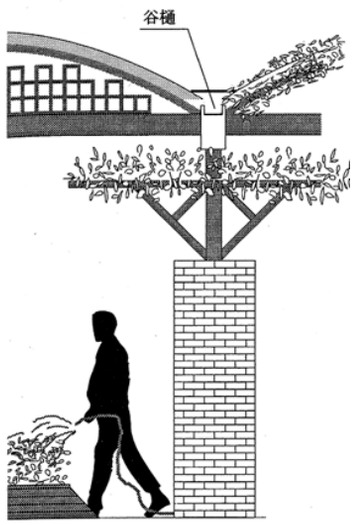
ガソリンが1リットル＝１９０円台になろうとしています。「ガソリンが高い！ 高い！」と言うと、「貧乏人は車に乗らず、歩きなさい！」という言葉が飛んできそうです。でも、ガソリンを2リットルも入れたら下水道の基本料金1か月分より高くなるという現実。このことを納得できない自分は間違っているのでしょうか。今回は、雨と下水道料金のお話です。

屋根雨水は樋（とい）を伝わり、小金井式雨水浸透ます等によって地下に戻ります。前回はその設置家屋数が全体の51％をこえたお話をしました。では、その他の雨水はどこに行くのでしょうか。

農地・緑地等の土に降った雨は地下に戻りますが、外への流出もあります。道路の雨はすべて下水道に流れ、水再生センターに行く合流地域と河川に行く分流地域があり、そのうち分流地域分は１５％です。小金井市では、不明水も含めた雨水を処理する費用は毎年約２億円前後ですが、「雨水公費･汚水自費」という原則があるので、その費用は一般会計、つまり税金で払っているわけです。

そこで、雨水をなるべく流さない保水型のシステムを市民と一緒に考えていかなければなりません。雨水浸透施設・雨水貯留施設や農地・緑地の保全をすることも、その手法の一つと考えられます。屋上壁面緑化や雨水によるビオトープなど、雨水を資源として捉えるまちづくりをすれば、歩いて楽しい街並みになり、しかも節税にもなるのです。

（文=小金井市下水道課･倉宗司）



小金井市環境政策課だより（その１）

こんにちは、小金井市環境政策課です。これから何回かに分けて、環境係の業務のお話を掲載させていただきます。

環境部環境政策課は、部長、課長、環境係５名、緑と公園係５名の計１２名で業務を行っています。環境係の業務内容は、環境行政の総合的な対策に関すること、公害の防止の指導及び相談に関すること、鳥獣、衛生害虫等の防除に関すること、空き地の管理の適正化などを扱っています。

この他に、環境政策課で作成している「小金井市環境基本計画及び小金井市環境行動指針」の推進、また庁内に対して、小金井市地球温暖化対策実行計画、今年新たに環境マネジメントシステムを作成し導入を予定しています。もちろん、環境市民会議との関わりも含まれます。

第二庁舎４階にある環境政策課

これから、このような業務の中でのお話をさせていただきたいと思います。次回は、公害のお話をいたします。

環境市民会議＊部会日誌 ――― ５つの部会について、ごく最近の活動の中から１場面を紹介します。

ま ちづくり部会

まちづくり部会が「連雀通りにベンチや豊かな緑陰のある並木道を」と行政に提案してから２年が経過しました。私たちのモデルとなった栗山公園沿いのケヤキ並木は年を重ねるごとに豊かな緑陰が広がり、歩く人々をほっとさせています。しかし、事業半ばの連雀通りには低木だけが植えられ、街路樹の選定は行政に委ねられたままになっています。

先日、酷暑のなか、蒲田駅近くで桜や木蓮の並木道に、樹木をコの字型で囲んだ木製のベンチが、視界の途切れるまで続いているのを発見しました。道行く人々が暑さをしのいで木蔭の下のベンチで休憩しています。20 年後、地球はたぶんもっと暑くなっているし、高齢者も増えているはず。ベンチと木蔭は超高齢社会になくてはならないものです。

最近「小金井まちづくりフォーラム」のメンバーたちと、地球温暖化に対応し、かつ超高齢化社会に優しい「歩いて暮らせるまちづくり」を描いてみようということになりました。まちづくり部会も一緒にこの問題に取り組んでみたいと思っています。（杉本早苗）

ご み部会

7月3日（木）ミニ部会　13：30からのごみゼロ化推進会議の事業所部会役員会終了後、前原坂上のジョナサンで「ミニごみ部会（?）」を開催。思えば、足かけ２年の新焼却施設建設場所選定等市民検討委員会に、環境市民会議ごみ部会から２名が出席しているため、部会活動の集中度が散漫になるという現状がある。

7月5日（土）10：00スタートの「生きもの」がテーマの環境サロンがおもしろそうでＴさんは出席したいと言い、私は 14：00からのごみ集会に集中したいと答える。虫といえば、検討委の「戦友」の案内で思いがけなくも鑑賞できた蛍への感動を短歌にまとめたなど、他愛のない話をしてから本題に入る。7月7日（月）七夕はキャンドル・ナイト定例会で「小金井のごみ問題」の報告が予定されており、これを今後の活動の新たなきっかけにしようと話しあった。

ミニ部会を終え、交差点の信号を渡ろうと振り返ると、乱雑な自転車を１台１台揃えて並べているＴさん。「親のしつけ？　それとも貴方の美意識？」と尋ねると、「さあ～」といつもの控え目な笑顔。「私もやってたわ。若いとき」と答え、彼はＫ市民新聞の配達に、私は美容院にと二手に別れた。（中村良子）

地 下水測定部会

7/6（日）湧水量の測定日誌　毎月第１日曜日に、3ヶ所の湧水ポイントで湧き水の量を測っている。今日も 11 時に滄浪泉園の前に集合した。受付の方に挨拶して中へ。大きな木が灼熱の太陽を遮り、とても涼しい。鳥の声も聞こえる。池から水が流れてくる水路でバケツに１杯の水を採る。１人は、水が脇から流れないようにシートで流れを集める。１人は掛け声に合わせて、集めた流れにバケツを入れて水を汲む。もう１人は、カウントダウンの掛け声でタイミングを計り、バケツがいっぱいになるのに何秒かかったかストップウォッチで計る。いつもながらタイミングが難しい。次の作業は、バケツの水の量の計測だ。上を切った２リットルのペットボトルに移し、秤で量ること数回。測定シートに記録し、その合計をかかった秒数で割って、１秒にどの位の湧き水が出ているかを測定している。7月は少し増えていた。このところ雨が多かったからか。さあ、あと２ヶ所。地道な作業が続く。（小山美加）

環 境学習部会「田んぼの時間」

7/20(日)「生きもの観察会・草取り・うちわ作り」

子どもも大人も一緒になって、僕たちをペットボトルに入れて眺めたり、ルーペでのぞきこんだりしていたな。僕たちはなぜか子ども達の人気の的なんだ。田んぼの中ではコナギ、オモダカ、ホシクサなどが盛んに数を増やしていて、僕たちのいい隠れ場所になっている。何しろ水の中の眺めがなかなかいい。「草取り」とか言ってたけど、水草も生きものを暮らしやすくするとかで半分くらいしか取ってなかったな。なんだか変わった田んぼだけれど、ありがたいね。午後は、白うちわに生きものや野の草の絵を描いていたな。もちろん僕を描いてる子もいた。うまく描いてくれたのかなぁ？これから僕たちは田んぼを離れて畑や林の中で暮らすけど、来年5月には代かきを目指してまた帰ってくるから、それまでみんな達者でな！（ニホンアマガエル）

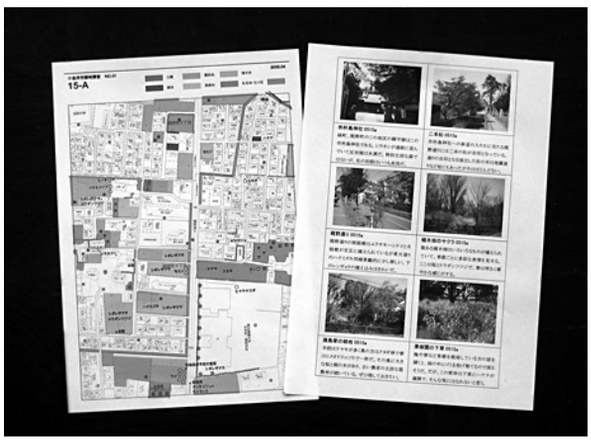
＊次回活動日は 9/6（土）。10:00 ～ 13:00 に「植物・昆虫観察会」を行います！

緑 調査部会

7月3日(木)、第二庁舎501にて打ち合わせ　今年度の課題である2005年作成の「小金井緑地マップ」の追加・修正について、具体的な内容の確認と、部会員それぞれがどの調査区域を担当するかを話しあった。

人数はまだまだ不足気味ではあるが、今回3名の新部会員の参加があり、心強い。現在コアメンバー9名。市内の地図を眺めながら、皆で自分のフィールドをチェック。ただ、緑・関野・梶野・東町といった東～東北区域の参加者が少ないため、そちらが手薄になる点がひとつの問題としてあがった。

また、新参加者に実際の調査方法を知ってもらうことを目的として、具体的に特定の場所を決めイベント的に『全員参加のサンプル調査』を行うことが提案された。9月上旬を予定していますが、緑地マップつくりに興味のある方、大歓迎です。マップを片手に散歩を兼ねた緑の調査にぜひご参加ください。（文=高橋利行）



関連市民グループの紹介

NPO法人 グリーンネックレス

ＪＲ中央線三鷹～立川間の沿線6市13.1 kmの高架化事業が進んでいます。高架化によって道が南北につながり、高架橋の周辺景観とともに交通環境も変わろうとしています。私たちはこの高架化事業が無機質な構築物の出現で終わることなく、武蔵野台地の「水・みどり・人のふれあい」を大切にした、新しいまちづくりの契機となるよう、「武蔵野の大地に根ざす」「環境共生鉄道の創造」「まちづくりの広域連携の実現」を基本理念として様々な活動を進めています。

■ JR中央線高架化に伴う雨水活用実験の実施

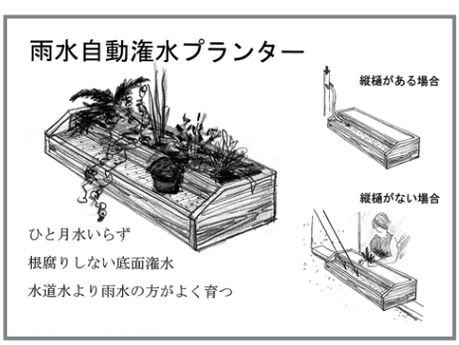
2007年度の全国都市再生モデル調査を内閣府より受託。武蔵小金井南第1自転車駐車場において2008年2月16日から3月23日にかけて、中央線高架橋の雨水を活用した緑化・発電の社会実験を行いました。この雨水発電の仕組みを改善し、東京都立小金井工業高校等で、発電実験を行う予定です。

■雨水自動灌水（かんすい）プランターによる商店街緑化

小金井市中央商店街協同組合と協力し、社会実験で開発した雨水自動灌水装置を設置し、違法駐輪の抑制と商店街の景観改善に役立つ取組みを進めています。

■中央線・武蔵野の緑に華のある風景づくり

小金井市内の農家の協力を得て、子育て支援グループと協力しつつムラサキハナナを育て、農地や緑地の様々な生態を学び、交流する取組みを進めています。



緑地一面に咲いたハナナの群れに入って

● NPO法人グリーンネックレス事務局
〒184-0004　東京都小金井市本町5-7-16
TEL. 042-385-3191　FAX. 042-385-7037
E-mail. info@green-necklace.org

田んぼ物語【6】

蛍のひかり

農事組合の寄り合いから帰ってきた祖父のごつごつした手を開くと、そこから光の粒が立ち昇った。蛍の季節がやってきたのだ。

夕食を終え、浴衣に着替え、夜の8時少し前。さそい合わせた近所の子ども達と萬家（よろずや）に集まる。

萬家と屋号で呼ばれていた商店が夜でも少し明るくなっていて、店の脇から畦道（あぜみち）を山手に向かって歩くと、辺りはどんどん暗くなってゆく。暗闇が恐ろしい年頃には、もうそれだけで十分な冒険だ。まだ青い稲の上を風が波音をたてて過ぎてゆくと、かぼそい声で唄が始まる。「ほ、ほ、ほたるこい、こっちの水はあまいぞ。そっちの水はにがいぞ…」

暗闇に慣れない目でせまい畦道を進むと、突然「ボチャン」と何かが落ちる音。後ろを歩いていたはずの弟が、水口（田んぼの取水口）に落ちている。子ども達が一斉に笑う。姿は見えないが、カエルたちの声が一瞬静まり返る。

膝までびしょ濡れになって泣いている弟をなだめすかし、落ち着いたところで顔を上げると、小さな青味がかった黄色い光の粒がふわりと横切った。真っ暗な田んぼの中で、あまたの小さな光の粒が浮かんだり止まったりしている。カエルたちの声が一層騒がしくなる。

梅雨の合間の雨上がり。空には満天の星、地上にも無数の光。あまりにも美しい光景を前に、気持ちが悪くなくなるような妙な感覚があった。

戸を開け放した夏の寝床には蚊帳（かや）が吊られ、泥んこの浴衣を着替えて潜り込むと、捕まえてきた蛍を蚊帳の中に放す。

ふわりふわりと蛍の舞う大きな虫かごの中で、1匹の虫になったような不思議な気持ちで眠った。

朝になると蛍のすがたは消えていた。短い命、祖父がそっと逃がしていたのだった。　（絵と文＝瀧本広子）

（作＝あやこ）

環境講座のお知せ

洞爺湖サミットをうけて、これからの環境と経済を考える～お話とワークショップ～（仮）

日時：2008年9月23日（祝・火）　13:30～16:30
場所：上之原会館
内容:1.「洞爺湖サミットをうけて、今後の環境と経済を考えるお話」東京経済大学・除本理史教授　2.「ワークショップ：これからの環境は経済とともに、どう変わるのか皆で考えてみましょう」
＊詳細はホームページでご確認下さい。

編集後記

●たてもの園「建物と夏」は目からウロコの展示で楽しめました。「夏は暑いもんだッ」ではもう過ごせない今日このごろ。〈オ〉
●寂しがりやでいつも私の足下で寝ころんでいる猫が最近は姿を見せない。探してみるとまぁ変な場所で寝転がっている。我が家の風の抜ける涼しい場所をしっかりと探し出しているという訳だ。〈ク〉
●常に人は変化を求める。しかし急激な変化は求めない。ゆるやかに少しずつ…。小金井のいいところは小さいこと。小さくゆるやかに変われる。もし間違ったとしてもまたやりなおせる。Andante（ゆっくり歩く速さで）。〈タ〉
●環境コンプレックス・その2：都内でパーティーの手伝いがあり、せっせとゴミを分別した。捨てる時、一緒にされた。あったま来たー! だけど、分別って環境を意識してます、って言うかあ、◎だよね。だからやめたくないなあ。つーか、それ当然でしょ!〈ハ〉
●首のうしろ側がいやに暑い。温度センサーがあるからか。保冷用のジェルを当てると、これが気持ちいい。クーラーいらずだが、ビールいらず、とはいかない東京の夏なのでした。〈ミ〉

小金井市環境市民会議会報 No.08
[小金井の環境を考えるためのマガジン くるりん・ぱ]
2008年8月発行
発行＝小金井市環境市民会議
http://www.koganei-kankyo.org/
[メール] jimukyoku@koganei-kankyo.org
企画・編集＝くるりんぱ編集部
（緒方恵一、串田光弘、瀧本広子、早崎眞佐子、宮本幹江）
制作協力＝小金井市 環境政策課